

# 平成 27～29 年度新たな学びに関する教員の資質能力向上のためのプロジェクト 成 果 報 告 書

広島県教育委員会

本県では、平成 26 年 12 月に「広島版『学びの変革』アクション・プラン」を策定し、平成 27 年度より、「コンピテンシーの育成を目指した主体的な学び」に学びを変革していくための取組を進めている。

本プランでは、平成 30 年度に県内すべての小中高等学校においてこの取組を実施することとしており、「学びの変革」を全県で進めていくため、県内の小中高等学校の指定校（パイロット校等）を中心に、育成すべき資質・能力の具体化・明確化や、そのために必要と考えられる総合的な学習の時間及び各教科におけるカリキュラム、指導方法及び評価方法等の研究開発を進めていくとともに、指定校の実践を他の学校にも普及させるなど、「学びの変革」の全県展開に向けた取組を推進してきた。

学びに関する教員の資質能力向上のためのプロジェクトの実施にあたって、これらの指定校のうち、次の 3 校を実践フィールド校として位置付け、事業を進めてきた。

- ・廿日市市立四季が丘小学校
- ・廿日市市立大野中学校
- ・広島県立可部高等学校

各学校別の、取組の背景・ねらい、方法・進め方及び留意した点、効果の有無、課題や改善策などについては次のとおり。

## 【廿日市市立四季が丘小学校】

所在地：廿日市市四季が丘 8 丁目 1 - 1

HP：<http://www.hatsukaichi-edu.jp/shikigaoka-e/>

学校規模：14 学級，児童数 307 名

### 1 研究の概要

#### (1) 研究主題

学び続ける子どもの育成

～主体的・対話的で深い学びを促す授業づくりを通して～

#### (2) 研究内容

- ①「主体的・対話的で深い学び」を促す授業づくり
- ②「主体的・対話的で深い学び」を支える校内研修づくり

#### (3) 育成したい資質・能力

平成 28 年度に引き続き平成 29 年度も、「課題発見力」、「思考力・判断力・表現力」、「主体性」、「自己肯定感」の 4 つを設定した。

総合的な学習の時間では全ての資質・能力の育成・伸長を目指してきたが、教科では、単元の特質や児童の実態に応じ、焦点化して設定した。

#### (4) 取組内容等

児童の思考の過程に寄り添って資質・能力を評価する研究協議会では、「個の変容見取りシート」を活用し、複数の教員で捉えた児童の姿を交流することを通して、児童の資質・能力の変容の見取りについて共通理解を図ってきた。

その内容を自分の実践につないでいくことで児童の変容や成長を把握し、適切な支援を行うよう工夫・改善した。日々の授業では、国語科・算数科を中心に視点を明示した振り返りを集積し、評価規準を定め、内容の分析を行った。

記述の変容を継続的に見取り、児童の実態に応じた支援や手立てを取り入れ、内容の広がりや深まりのある振り返りを目指してきた。

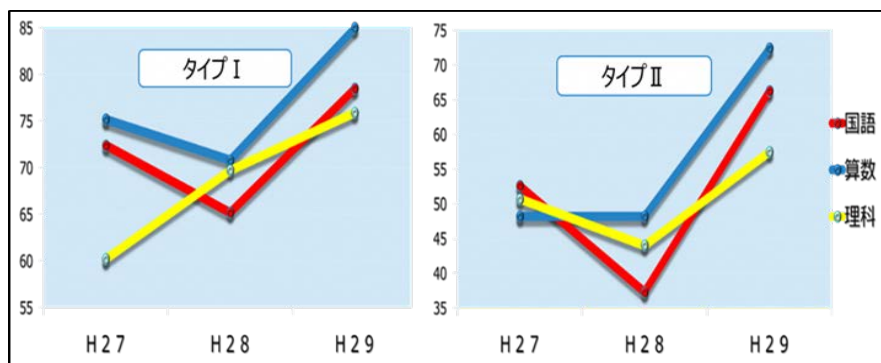
## 2 成果と課題

### (1) 児童の学力の変容

平成 29 年度の広島県「基礎・基本」定着状況調査において、一定の成果を出すことができた（図1）。

指定を受けた2年目からの総合的な学習の時間、また平成29年度の国語科の単元開発では、児童の実態・課題意識ありきに、育てたい姿・ゴールイメージを明確にした授業づくりを進めてきた。特に意識したことは、学習指導要領解説を根拠に指導事項を見極め、焦点化したことである。それらを基盤に、児童の学ぶ意欲を喚起させるような手立てや仕掛けをちりばめ、理由や根拠を明確にしながら自分の考えを表現する活動を充実させた。また、「整理・分析」の過程では、目的を明確にした対話の時間を取り入れたことで、自己の学びの広がりや深まりを実感できるようにしたこと、その学びをもとに振り返りを書くことができるようにしたことが結果につながったと捉えている。

図1 広島県「基礎・基本」定着状況調査の通過率



### (2) 学習に対する意識の変化

下表1に挙げた4つの項目は、平成29年度「基礎・基本」定着状況調査の児童質問紙調査票における「学びの変革」パイロット校事業の検証の中から課題が見られたものである。これらの課題を克服するために、授業改善の手立てとして児童の学習意欲を喚起させるような導入の工夫や問いの精選を積極的に行った。

総合的な学習の時間の単元開発においては、各教科の学びの活用・発揮場面や情報の収集の

過程を充実させたり、地域や外部講師と連携し、体験活動の場を積極的に取り入れたりした。

表 1 肯定的に評価した児童の割合 (%)

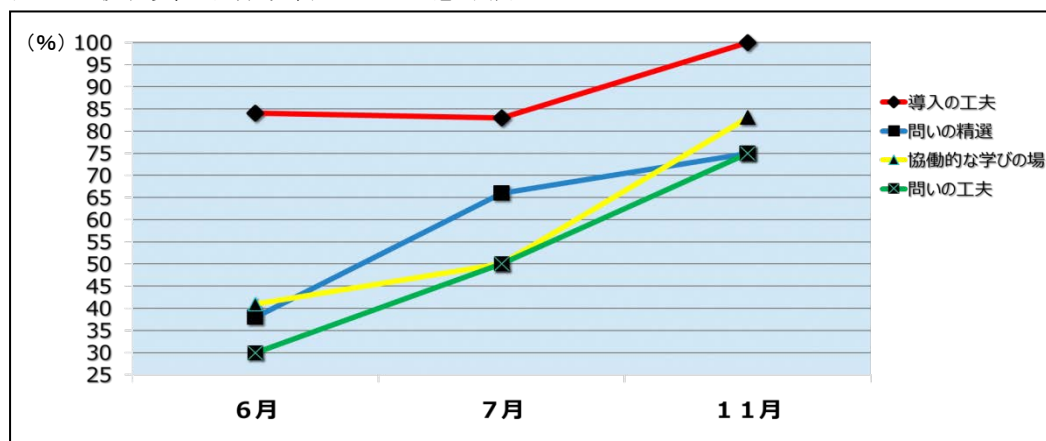
| 質問の内容      | 6月   | 2月   |
|------------|------|------|
| (8) 学習習慣   | 71.4 | 95.2 |
| (9) 学習意欲   | 71.4 | 90.0 |
| (15) 情報の収集 | 74.6 | 88.2 |
| (26) 体験活動  | 77.8 | 98.3 |

### (3) 教員の指導や意識の変化

一人一人の教職員が自分の指導のあり方を振り返り、課題の提示や発問の精選など授業改善の視点を明確にもち、主体的に授業づくりに取り組めるようになってきた。職員室では児童の成長を喜び合う姿や色々な視点から育てたい姿について議論し、楽しみながらゴールイメージを描き、学びの創造に向けた授業づくりにチャレンジする風土が生まれてきている。

図2のグラフは、教職員を対象に、授業改善の視点をもとに年間を通じて振り返りを行い、その変容を表したものである。どの項目も一定の成果を出すことができ、特に「導入の工夫」については100%に到達した。導入場面の教師の発問や指示を精選しただけでなく、児童自身が新たな課題を設定し、追究できるよう授業の終わりに振り返りの場を充実させることを通して、毎時間がスパイラルにつながる授業づくりや単元開発につながった。

図2 教職員の授業改善における意識調査



### (4) 域内の普及について

平成29年度は、廿日市市「学びの変革」推進協議会での実践報告や、同市・他市町での校内研修の視察や指導助言を行うことができた。また、同市の実践指定校の総合的な学習の時間の単元計画作成における具体的な助言を行うことができた。1月の学力向上実践交流会では、本校の取組を県内はじめ、広く発信することができた。今後もこれまでの取組や実践をつなぎ、『学びの変革』の具現化に向けた主体的な学びを実現する授業づくり等、広島県立教育センターの講座や推進協議会の場を通じて普及していきたい。

### 3 今後の改善方策等

3年間の取組を通じ、児童の学力と資質・能力及び、教員の授業改善への意識の向上において、一定の成果を出すことができた。平成29年度から取り組んだ国語科の研究は、単元開発だけでなく授業づくりの視点において今後につながる大変有効な学びであった。児童と教員が楽しみながら授業に向かうことができるようになったことも大きな成果である。今後は、1年を通して「深い学び」をデザインするために、生活科・総合的な学習の時間を中核として他教科等との関連を意識しながらカリキュラムをデザインし、単元配列表やカリキュラム・マップの見直し、改善・更新を行っていききたい。今後も、質の高い単元開発を組織的に進め、児童にさらなる確かな学力と資質・能力を身に付けていききたい。

**【学校名：廿日市市立大野中学校】**

所在地：廿日市市大野原4丁目6-20

H P : <http://www.hatsukaichi-edu.jp/ono-j/>

学校規模：12学級、生徒数276名

#### 1 研究の概要

##### 1. 1 研究テーマ

本校は、施設一体型小中一貫教育推進校として、義務教育9年間の学びの系統を意識したカリキュラムの作成等、小・中において一貫した指導を推進し、更なる児童生徒の学力の向上に取り組んだ。平成29年度は、研究テーマを「『対話的な学び』を通じた説明力の育成」と設定し、本校で育てようとする資質・能力及び態度である「説明力」と「自己有用感」を、「対話的な学び」を通して育成を図った。

##### 1. 2 取組の重点項目

###### (1) 実施体制

小・中合同研修会を全体研修会と、小学校・中学校の教員が混在した次の3つの部会を構成し研究を行った。

|        |  |
|--------|--|
| ①全体研修会 | ・理論研修<br>・研修内容の実践・報告                                   |
| ②習得部会  | ・「習得」場面の研究推進<br>・「課題発見・解決学習」の単元計画作成<br>・効果的な対話の在り方     |
| ③活用部会  | ・「活用」場面の研究推進<br>・「課題発見・解決学習」の単元計画作成<br>・他教科との関連        |
| ④探究部会  | ・総合的な学習の時間の研究推進<br>・児童生徒の主体的な学びにつながる「課題発見・解決学習」の単元計画作成 |

また、教職員全員参加の研究にするために、次の2点に重点をおいて推進した。

- ① 小学校では各学年1本(他クラスでの事前授業、事後授業を含む)、中学校では全教職員各1本の指導案作成、研究授業を実施し、改善レポートや修正指導案を作成した。
- ② 公開研究会では、各部会で研究した内容の動画を作成した。動画作成にむけての理論研修や児童生徒の学びに着眼した授業実践事例の精査、協議等を通して、教職員全員で研究内容を共有し、実施・推進することができた。また、公開研究会の各部会においては、部会のまとめ(成果と課題・修正点)を校内の部会リーダーが行った。

## (2) 研究内容

### ① 「対話的な学び」を取り入れた「大野まなびのモデル」

小学校第1学年から中学校第3学年までの全学年が、毎時間、全ての教科で「対話的な学び」を取り入れた授業を行った。「対話」を授業導入場面や、集団思考(ペア・グループ・全体)場面、授業の終わりの振り返り場面で行い、その対話がめあての達成に効果的なものになるために、本校が独自に作成した「説明ツール」や、聞き手が視点に沿って評価する活動である「ピア・フィードバック」を手立てとした。

### ② 逆向き設計の「課題発見・解決学習」の単元開発について

単元を逆向き設計で作成した。単元の目標や評価規準に則して、初めに単元末に実施する単元末説明力問題と、その解答や評価規準を作成した。次に、その問題が単元末に解けるようにするために、どの学習場面でどのような力を育成する必要があるかを考え、単元計画に位置付けた。また、主体的な学びにつなげるために、教材の選択や単元構成、各授業での問いかけや振り返り等の工夫を行った。

また、研究授業を実施した際には、改善レポートと修正指導案を作成し、次に繋がる実践を行った。

### ③ 各教科等との関連を意識した総合的な学習の時間の実践

総合的な学習の時間では、単元構想図を作成した。他教科等で学習した知識や手法を、総合的な学習の時間で活用する場面を設定したり、総合的な学習の時間で必要とされる力を意識して、教科の学習内容を構成したりした。総合的な学習の時間と他教科等を、相互に関連させ活用する場面を設定することは、資質・能力の向上に繋がると考える。

## 1. 3 資質・能力の評価について

本校で育てようとする資質・能力及び態度である「説明力」と「自己有用感」について、発達段階に応じた目指す姿を設定し、指導者と児童生徒が共通認識を持ち、取り組んだ。

### (1) 「説明力」の評価について

単元計画を作成する前に、単元末にどのような説明力が育成されていけばよいのかを明確にし、単元末説明力問題、またその正答例、評価規準の作成について、研究を推進した。

### (2) 「自己有用感」の評価について

「自己有用感」は教育活動全体で育むものであり、授業においては「対話」活動において、互いに認め合う活動を通して育まれるものと考えている。評価については、授業の振り返りや単元末のまとめ等で記述させ、評価している。

## 2 成果と課題

### 2. 1 調査問題の結果及び生徒の意識調査

- ・全国学力・学習状況調査の結果

平成29年度中学校第3学年の小学校第6学年時との比較

|        | H26小6年時 | 平成29年度中第3学年 |
|--------|---------|-------------|
| 国語B    | 95.4    | 107.8       |
| 算数・数学B | 90.2    | 93.1        |

※県平均を100として

- ・自己有用感

生徒の意識調査「自分のよさは、まわりの人から認められていると思います。」

|     | 肯定的評価 (%) |              |
|-----|-----------|--------------|
|     | H26年7月    | H29年7月 (県平均) |
| 全学年 | 58        | 77(62.2)     |

#### (1) 成果

・「説明力」の指標である調査結果において国語Bで12.4P、算数・数学Bで2.9P伸びた。これは、小・中学校が一貫した指導の中で、説明力の育成が図られたと考える。

・「自己有用感」の指標である生徒の実態調査では、3年間の取組の中で19P伸びた。これは、教育活動全体で資質・能力の育成を意識した指導を継続して、また、教職員全員で取り組んだことが要因であると考ええる。

#### (2) 課題

・調査問題の結果及び児童生徒の意識調査では向上が見られたが、更なる向上を目指し、教育活動全体で取り組みたいと考える。

### 2. 2 域内への普及

本校の公開研究会では研究報告を、廿日市市「学びの変革」推進協議会では、「課題発見・解決学習」の単元計画作成方法や、評価の在り方について報告、研修を行った。また、次世代型教育推進センター等に情報提供する等、普及に努めた。

## 3 今後の改善方策等

3年間、本校で育てようとする資質・能力及び態度を「説明力」と「自己有用感」とし、研究を推進した。今後は、平成29年度までの研究を土台とし、単元末説明力問題の作成や、その評価規準の精度をあげていきたい。また、「課題発見・解決学習」の単元開発に取り組んでいきたい。

【広島県立可部高等学校】

所在地：広島市安佐北区可部東4丁目27-1

HP：http://www.kabe-h.hiroshima-c.ed.jp/

学校規模：24学級，生徒数768名

- 研究内容：『わかった』『できた』を実感できる授業づくり  
～学びに価値を認め，学習意欲が向上する～に係る取組

1 ねらい

変化の激しい社会においては，単に知識を多く持つだけでなく，既存の知識を活用し，協働して新たな価値を生み出す力が必要とされている。そこで，本研究を通して，学ぶ知識・技術【INPUT】と活用【OUTPUT】を結ぶ過程について研究し，授業改善を図る。

2 概要

本校のミッション「地域の伝統校として時代の変革を生き抜き，地域社会に貢献できる有為な人材を育成する」を実現するため，本校では「目指す生徒像」を，「(1)主体的に学ぶ意欲を持つ生徒，(2)進路実現に必要な学力を身に付けた生徒，(3)自律し，社会人として必要な資質を身に付けた生徒」としている。本校の3年間すべての教育活動を通じて育成する3つのキー・コンピテンシーとして，論理性，自律性，協働力を挙げている。このビジョンを実現するために，課題発見・解決学習推進委員会を校長，教頭，主幹教諭，中核教員(数学)，教務主任，実践推進リーダー，進路指導主事，国語，地歴・公民，数学，理科，外国語(英)の教科主任で構成し，次に示す取組について，計画立案，実践運営，評価・振り返りを行った。

(1) 単元・授業の構成について

ア【INPUT】授業の構成：目標の提示→振り返りの活動

単元や毎時間の授業の目標を実現し，生徒自身が学びを自覚化するために，授業の適切な目標設定と共に，全教室に設置した「目標ボード」で目標を示し，授業の最後に振り返りを設け，生徒自身が目標の達成度を確認できる授業展開となるよう，学校全体で取り組んだ(図1)。

適切な目標と振り返りの設定ができているか，また授業展開が目標に合ったものになっているか等，教員の取組について情報交換の時間を教科会で設けるなど，各教科で研究を進めた。目標の設定は，何ができるようになり，また学んだことをどう説明するかといった具体的な内容となるように工夫した。数学科はリフレクションシートを活用して振り返りをし，次回疑問の多かった問いを中心に確認テストで授業を始めている。2年生「現代文B」では，生徒が前時に書いた振り返りに対して教師がコメントを付けたプリントを，授業の最初に配付し，生徒の振り返りの際に生じた疑問点や意見から次の授業が始まるようにして意見を共有したり，生徒の中から出た疑問から理解を深めていったりする授業展開となっている(図2)。

数学科は授業の終わりにリフレクションシートで理解したことや疑問を書かせ，次の授業は再度難しかった内容について，復習小テストから授業をスタートする枠組みで授業を展開した。

図1 「現代文B」 振り返りシート

| 月 日 曜日  | 第11回  | 11月15日 水 曜日 |
|---|---|-------------|
| <p>☆本時の目標<br/>「私」が成り遂げたことと、その後、短時間で急激に変化する心情について理解することができる。</p> <p>○わかったこと<br/>「私」は世間体にとらわれつづけていくことになる。</p> <p>●わからなかったこと<br/>なぜか「私」が可愛そうになりました。好きな人を自分がもらうことができたのに、罪悪感を感じながら毎日過ごすなんてくだらなく思います。</p> <p>☆本時の目標の達成度<br/>「私」まで自殺した理由が</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 私は十分に達成した。</li> <li>2 私はある程度達成した。</li> <li>3 私はあまり達成できなかった。</li> <li>4 私は全く達成できなかった。</li> </ol> | <p>☆本時の目標<br/>「私」が、どのようにして打撃を加えたのかを理解する。</p> <p>○わかったこと<br/>奥さんは「私」の秘密にまだ気がついていない。</p> <p>●わからなかったこと<br/>今の「私」は金がないからあがるのがすごく切なくて思っています。本当にそれが</p> <p>☆本時の目標の達成度</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 私は十分に達成した。</li> <li>2 私はある程度達成した。</li> <li>3 私はあまり達成できなかった。</li> <li>4 私は全く達成できなかった。</li> </ol> |             |

図2 「現代文B」 生徒の振り返りを紹介するプリント

さあ、いよいよ、まとめの課題に入ります。この4人のコメントを見てください。

|   |
|---|
| ①女子曰く：なぜ「K」は自殺をする前に襦を開けておいたのか。  |
| ②男子曰く：「K」の、想像を超えるお嬢さんへの想い。もしかしたら誰よりも先に「私」に気づいてもらうために、襦をこないだと同じくらい開けていたのかもしれないと勝手に思った。         |
| ③男子曰く：部屋との仕切りの襦が、この前の晩と同じくらい開いていたというのにはどういう意味があるのか。実は「この前の晩」で自殺しようとしていたが、「私」が起きていたから出来なかったのか？ |
| ④男子曰く：「襦がこの間の晩と同じくらい開いていた」という文は、読者をはっとさせる。  |

この4人は、本文全体を踏まえる「まとめ課題」を私と一緒に作ったようなものです。感動。

①②③は「K」の真意を問うもの。そして、④は表現の効果を指摘するもの。22日（水）の授業は、この4つのコメントから始まります。

図3 「社会と情報」 受賞作



イ【OUTPUT】 学びの内容を深化させるパフォーマンス課題について

1年生「社会と情報」では、「情報モラルとセキュリティー」について1学期間学習した内容を踏まえて、情報モラルを広げるための4コマ漫画の作成を課し、第13回 IPA「ひろげよう情報



モラル・セキュリティーコンクール 2017」に挑戦し、応募数 6,720 点中受賞作 120 点の中に 2 名が優秀賞として入賞した。学んだことを構造化し分かりやすく相手に伝える方法を考えさせるこの課題は、学んだことを深化させるだけでなく、自己肯定感を高める機会となり、生徒の意欲も高まる効果的なパフォーマンス課題となった（図 3）。

3 年生「日本史 B」では武士の進出がいつに始まったのか、学んだ内容を生徒が整理し、平清盛、源義朝、源頼朝等のうち誰がきっかけを作った人物と考えるかをパワーポイントで説明させるパフォーマンス課題を課した。多様な考え方を知り、発展的な内容まで自分で調べたり、表現方法を工夫したりして、生徒の意欲を引き出す課題となっていた。

## （2）学ぶ知識・技術【INPUT】と活用【OUTPUT】を結ぶ協働的な学びを促す工夫の研究

### ア【INPUT】→【OUTPUT】協働的な学びで理解を深め、知識を活用させる実践例

講義中心の一方向の授業形態で INPUT に終始することなく、生徒自身が「考えて学ぶ」、「考えて知識を整理する」、「考えて学びを深める」ことができるような発問の工夫や、ペアやグループでの協議を多く取り入れた授業展開を全教科で研究・実践した。3 年生「地理 B」では、1 学期に単元「地図の活用と地域調査」において、ジグソー法で安佐北区・安佐南区の年代の違う地形図を分析させ、この地域の人口増加の理由について説明させる活動を行った。地形図の読み取り方を身に付けるとともに、これまでの学習内容で得た知識を活用して説明をすることができ、地域への理解を深め、総合的な学習の時間で 2 学期に行う地域の課題を考える単元「可部学」の学習へとつなげることができた。3 年生「生物」では、植物の光屈性について、これまでの学習を踏まえダーウィンやボイセン・イエンセンなどの科学者が行ってきた実験から、「何が明らかになる実験なのか」をグループで協議させた。それぞれの実験を対比しながら、科学者の思考をたどり、植物の屈曲のしくみについて結論を出させ発表した。この授業は、協働的な学びで思考を深める授業として、次世代型教育推進センターの HP にも掲載された。このようなグループワークで活用するホワイトボードや磁石、指示棒などを使用する授業が増え、多様な評価や授業改善に関する書籍の貸出も多くなり、教職員全体の取組となっている。

### イ【INPUT】→【OUTPUT】を推進するための授業研究及び授業の相互観察の推進、校内研修における実践事例の共有と協議

1・2 学期に「授業観察強化月間」を設け、自教科と他教科の授業を必ず見に行くようにしている。「授業観察カード」を利用し、目標設定と振り返り活動、その授業の研究仮説を略式指導案に明示し、授業を見る際は、「生徒の変容」に注目し、目標設定や授業展開が生徒の現状に適したものであったか等を事前・事後に教科会等で協議した。また、平成 29 年度は 6 月の校内研修会で、本校の取組事例を動画や写真で紹介し、授業の工夫や取組についての情報共有をしたり、パフォーマンス課題についての協議を行ったりする場を設けた。本校の「学びの変革」に係る取組を全職員で再確認し、今後の取組を具体的に協議する機会となった。また、各学期の最初に本校での取組をまとめた通信を発行し、取組事例の紹介等を行い、情報共有を図った。

8 月には広島県立教育センターのサテライト研修講座を活用し、「ICT を効果的に活用した授業づくり」講座を全職員で受講した。ICT を活用する授業が増加したため、新たに 7 部屋に ICT 設備（プロジェクターとスクリーン、実物投影機、スピーカー等）を設置し、環境整備を

進めた。

11月の公開研究授業と講演会では、岡山県立和気閑谷高等学校長の香山真一氏を講師に招き、対話的な学びを通して共同体の中で貢献し合いながら、主体的に学んでいく生徒を育てることや、「できる」「わかる」「使える」場を何度も与え、学習者が「既知」と「未知」との葛藤や調整を経ながら「既知」に組み替えていく過程が学習には必要であることを学んだ。

#### ウ【INPUT】→【OUTPUT】授業以外での知識・技術を深化・活用させる課題発見・解決学習の推進

学校行事を再検討し、遠足・クラスマッチを整理して、7月にクラスデーを全学年で実施した。生徒自身が企画・運営をして、映画鑑賞やバーベキュー、体験活動等を行った。予約や参加費等の調整で課題が生じると、担任と相談したり、他クラスと調整したりするなど、生徒自身が工夫をして全員で楽しめる内容とした。事後アンケートの満足度も非常に高く、学校行事を課題発見・解決学習の実践の場にすることができた。部活動では生徒自身が振り返りを行い、自分たちで練習メニューを考えるようにさせたり、保健室では生活習慣の見直しが必要な生徒に「自己Checkシート」を使って、自己管理をさせたりした。2学年では、LHRを使って各教科の学習の成果を発表させる「学習成果発表会」を昨年に引き続き実施する予定である。学習内容を振り返るだけでなく、自分たちで発展させて表現させる機会を設定し、自己肯定感を高める場としている。

### 3 成果

授業評価アンケートより、目標ボードの活用（肯定的回答88%）と振り返りの実施（肯定的回答80%）が定着し、約90%の生徒が主体的に授業に参加している。授業を通して世の中や異文化への関心が高まったと回答した生徒も78%（前年23.2%）と増加し、授業改善の成果が表れた。研修会や学期毎の通信で教職員間の情報共有を図り、学校全体で協働的な学習や学習したことの振り返りを徹底し、計画的にパフォーマンス課題を課すようにした結果、自ら学ぶ態度が身に付き、特に2年生で家庭学習時間が増加し、11月の模擬試験の偏差値45以上の生徒数が過去4年間の平均と比較して国数英・3教科総合すべて2倍以上増加した。

### 4 課題

学習内容に応じた多様な評価方法と評価指標について、引き続き研究を進める。教科や単元の特性に応じた効果的な指導方法と「知識を活用する問題」を更に研究し、好事例の共有化を図る工夫が今後も必要である。教科だけでなく「総合的な学習の時間」や特別活動等においても、課題発見・解決学習につながる指導や教科横断型の取組を取り入れていくために、カリキュラム・マップを作成し、実施していく。